Thinking Rugby 2002　No.2

本質から進化の将来を考える

ラグビーの面白さを的確に追求するために、その本質を把握することが必須要件であると同時に、ラグビーの普及発達に必要な課題として不可欠なことでもあります。

本質とは、そのものが現在の状態にあるもともとの性質・原点を指します。本質の本は、「木」という文字の根元のところに「一」を加えてその根元を示しています。木の中央に一を引けば末を示し、上方に一を引けば末を指す文字になります。本は原始・根源を示す言葉であり、未来の元であることを示しています。現実を正しく判断するためには、その物事の本質を究めることが要件であり、それをもとに、過去から現在に至る過程を認識理解することによって、未来を的確に見通すことが可能になるのです。その営みが、ラグビーの普及・発展に役立つ、有効で必要な筋道であると同時に、一人一人が生涯スポーツとしてラグビーを楽しむのに有意義な問題でもあります。

ラグビー界は 1960 年から 1970 年代にかけて RFU100 周年を機に、発祥よりの歴史を掘り起こし始め、あらゆる面で研究と反省を深めました。そして今日、ラグビー発祥 200 年を記念する 2023 年に向けて、1999 年Ｗ杯からミレニアム、そして 21 世紀にかけてと、画期的な躍動を遂げています。fitness と flair の向上は、ゲームをより powerfull に、一段 と unformula にし、instinctive という言葉まで表現に使われるようになりました。2023 年まで四半世紀を切った今日、改めてラグビーの本質に迫り、グローバルな普及発展への努力がなされています。

本質研究という本論に入る前に、日本的課題である身体的劣等感、即ちサイズの問題に触れておきましょう。20 年後はさておき、低迷しているわが国のラグビー人気の回復、そして普及という命題と、ラグビーメジャー国として世界と互角に戦っていくための直接的方策の 1 つが、国代表チームの輝かしい活躍でしょう。それについてのプロ化も急務です。メンバー内の外国人の数に関係なく、広く国内チームから、最大級の体格で走り回れる能力を持ったプレーヤーを集めてチームをつくり、キャプテンを核にして、simple ラグビーを連続して実践し、その中で skill を高めていくことです。

というのも、我々日本人は環境や生活様式の劇的な変革が無い限り、身体サイズで世界のトッププクラスになることは不可能だからです。フィットネスにも限度があります。スクラムハーフ以外は、接触とボールの取り合い局面でのサイズの差を補えないものがあります。
それはスピードと攻撃の連続または継続以前の問題であり、タフさにも通じるものです。マッコーミックは「サイズよりタフ」だと言い残しましたが、スピードやゲーム理解が選考にあたって重視されていては、めざすラグビーのスケールの枠を狭めることになってしまいます。セレクションの principle に不安を覚えます。

また、マッコーミックは足よりも位置で防御ラインを突破するプレーヤーでしたし、タックルしてもされても素早く立ち上がる動きは、目を見晴らせました。これら 2 つは日本が学ばねばならないことでしょう。サントリーの CTB イエレミアがタックル後すぐに立ち上がって球を奪ったプレーに衝撃を受けたと向井監督の感想が書かれていましたが、これは「今更・・・」というべきでしょう。基本的なことがおろそかにされていては、スピートも継続も不可能で、タフなゲームはできません。

バレーボール協会がバレー日本代表の一部を公募する方針を打ち出しました。応募資格は 12～22 才、バレーボール経験者でなく、高い身長や優れた運動能力を持つ未経験者も可能で、将来性のある選手を発掘する狙いもあるということです。かつて女子プロチーム結成に失敗し大林選手たちを迷わせたバレーボール協会が、起死回生をはかっての発想です。これに選ばれた選手と従来のＶリーグを中心とした選考で、A～C の 3 ランクに分けた候補選手 18 人を選ぶというのです。そうすることによりどんな人材が発掘されるかは別として、より多く・広い範囲のプレーヤーに夢を与え、周囲の多くのスポーツ愛好家にバレーボールへの関心を抱かせる効果は、計りしれないものがあるのです。

狭いエリート集団の中から選ばれた、画一的な代表チームが無残な負け方を繰り返すという図式は、バレーボールへの関心を失わせるものです。

本論の入口にきました。これまで、身体の小さい日本人にあった戦い方がいろいろ議論されてきましたが、身近にあるサイズに関係なく今すぐにでも着手できるもう一つの方法は、みんなでルールを正確に守って世界の一歩先を行くラグビーをすることです。ラグビーはプレーが先で、ルールは後です。永いラグビーの歴史の中で証明されているように、競技思想は勿論のこと、今日のルールも、実戦プレー面で完全に消化され生かされるまでに数年かかっています。指導者もプレーヤーも、考えとしては理解しても、それがプレーになりきるまでには、細かい修正や変遷があります。ここに日本が食い込む隙があります。ラグビーの本質を把握し、将来を見通す必要性がここにあるのです。

ラグビーの本質については、その発祥と以後のプレーとルールの変遷を紐解くことによって把握するのが筋道ですが、勿論、それぞれにその時代と人間の生活とラグビーとの係わりをさぐりながら、時々の現象とその推移を併せて考えなくてはならないのですが、その進化の過程と本質から、私たちは多くのことを学ぶことができます。

本論であるラグビーの本質を言葉にすることによって、明確にし、原点の典型として大切にし、継承し易いものにすることが、哲学の本旨である。ラグビーの本質分析しエキスを抽出して短い言葉で表現するならば次のようになります。

1.（発祥から）
　卵型のボールを、自由に創造し挑戦的に、
2.（原形から）
　イコールコンディションから平等（公平）にオープン展開
3.（基本的プレー）
　sportsman-ship を身に付け power と flair を全身でパーフォーマンスというアイデンティティをもった競技として、広く行われていた football が running　handling（kicking 含む）game へ変化し、進化し続けている。

そして、それらは今日まで一貫不変のものとして、脈々として受け継がれている。
競技するに当たって、実戦的には、次のように考えられてきました。

1 項の発祥からは、精一杯力強く、自由に、柔軟な思考で変化に対応し、楽しむことが目的であり、目標である。
2 項の原理からは、発祥の精神を生かすべく、規則（申し合わせや Laws）を決めつつ、人間性豊に（人間尊重と思いやり）を楽しむ。
3 項は、good bright interesting rugby をめざして、創造的に忍耐強く勝敗を争うことを楽しむ。

本質から現実に、とりわけ日本の現状に目を転じましょう。
本質を追求し続けて、普及発展を続けている世界の動きに比べて日本におけるラグビーの普及発展の歩みは、後進国の域を脱していませんが、飛躍の要件として、メジャーに肩を並べることを目標とするならば、先進国のラグビーの研究に留まることなく、それを越える研究と進化が求められます。
情報を分析し世界の進化をふまえて、日本のラグビー協会が全力で先導することは勿論ですが、一人でも多くの人が、一人一人が自分のラグビーそのものを interesting （興味ある）なものに「進化」させることにめざめなければなりません。そして国をあげてもっと面白いラグビー作りに努力しない限り普及発展は望めないし、人気の低迷から脱することはできません。人間がラグビーを楽しむ飽くなき努力をつづけてきた過程には、自由な精神があふれていました。変化に富んで挑戦的なものでした。

現実問題として反省すべきことの一つは、継続という言葉が安易に使われすぎることです。ラグビーは本来的にプレーを継続して行うものです。世界がプレー継続の重要性を唱えたのは、30～40 年前のことで、Skillfull Rugby や Highspeed Rugby が熟読されました。当時のゲーム展開と比べれば、今日のゲームはプレーが継続しスピーディになりました。ルールも改正され、継続のレベルが一段と上がりました。今日目指しているのは、高度な継続から生まれるゲーム展開の多様性・変化、そしてスピードの向上だけでなく、緩急の変化によるスピードの相乗効果であって、単に速さを競うという意味ではないのです。

分かり易い表現をするならば、日本選手権で優勝したサントリーの継続とスピードが普通のものと考えられるようにならなければなりません。継続という面で、世界的に普通よりはるかに劣るチームが、「継続ラグビーを目指している」と胸を張って言えるのは、全体的にいかに継続されていないかということを物語っています。ルールも継続を促すように形成されているのですから、ルールを正しく守り、ルールの意図が実現されるように実践すること、それによって、もっともっとプレーを継続して、ラグビーそのものを interesting なものに変えることが急務です。

実戦的には、第 15 条を「正しく」守ることが必須条件です。継続を唱えているだけではだめであり、「スピード」と「アタック」の中身をいかに充実有効なものにすることが問題です。過去にジャパンには展開・接近・連続をテーマに実戦し輝かしい時代を築いた実績がありますが、現代ラグビーはさらに現代的進化を必要としているのです。それは、より handling game の方向への改善です。それには、ルールを「正しく」守るということについての、真剣にして柔軟な思考力が必要です。ラグビーについての概念を見直し、習性を重んじることも大切ですが、表面的な現象だけを見て、激突だけを強調することは正しくないし、勝つことにこだわりすぎては、ゲームが固定化し、ラグビーそのものに興味を持つ人の範囲も狭くなり、ラグビー人口が減少するのは当然のことです。柔軟でフレキシブルな頭脳と思考によって、見直しが実現し、プレーの改善の先を考えることになります。プレーの見直しは相違の発見に始まり、漠然と見ていては見直しの必要を感じないでしょう。外国と比べて「日本に無いプレー」という発言にも何の反応（反省）もおこらないのが現実です。W 杯で惨敗しプロ化が叫ばれている今日、寸断、激突の偏重のラグビーについての概念を捨て、激しい接触を伴う流動的 handling game としての方向付けをはっきりさせることにより、必然的に展開継続のレベルが上がり、もっと楽しい、そして外国に負けない日本のラグビーを創造するということです。

課題解決の方法としては、ラグビーの歴史を勉強し、ルールの変遷を考察し、ルールを正確に守ることが大切です。本質を把握することと、ルールを「守る」という言葉の意味を正確にすることも重要です。語源的には、戦いで城を「侵されないように防ぐ」というのが「守る」の意味です。「目を離さずに見る」という意味もありますが、人間が作ったルールを侵されないようにする。人間の立場からは侵さないようにするのが守るということの姿勢です。勝手に自分に都合のよいように守るというのではいけません。

重ねて、15 条に注目しましょう。running handling game の方向へルールは著しい進化をとげているのです。地上に横たわることが絶対にいけないとされた football から、寝てプレー（パスしたり地上のボールを押す）することが、違法でなくなってきているのです。

目を現代ラグビーに転じて、実際問題として取り組みましょう。永い歴史の時代分けにあたっては、「現代ラグビー」を区分けし総括的に把握する必要があります。拙著「現代ラグビーガイダンス」ですでに述べたところですが、以後の推移も顕著です。ごく最近の傾向が見られる Super 12 のゲームも実に興味あるものでした。加えて去年の TriNations のゲームにおけるキックの多用に目を見張らせるものがあります。無用のぶつかりを避けるキックが有効に使われています。プレーの変遷を知らずに、本質と過程を理解せぬままに単にキック多用の方向へ進んではいけません。それまでの過程と基本的な考え方を理解しないでキックを多用するならば、ラグビーの本当の面白さが分からないままに終わってしまうでしょう。ラグビーの本質を確認し、努力の先にある将来像を明確にすることです。

RUNNING HANDLING GAME であるラグビーは、running・handling・contact・kicking の 4 つを基本プレーとし、イコールコンディションからのフェアーと、オープン展開と事故防止を合い言葉に展開継続技能を競うものです。激しくぶつかり会う場面が目立ちますが、man's game だと強調したのは昔々のことです。痛さと、地面に倒れることと、汚れるのは付随的なことで、

無い方がよいのです。日本が基本的な running handling game を 理解達成するまえに、世界は TriNations にみられるように running handling game プラス kicking という新しい instinctive ラグビーの時代に突入しているのです。というのも、ラグビーの面白さの原点は、「FLAIR」即ち小局的には瞬間の判断 、戦略的には挑戦、ゲームの内容としては unformula であることにあります。変化に富んだ流れとプレーの継続からもっともっと面白いラグビーが創造できるのです。flair については、別題でとりあげることにします。

さて、ここで改めて本質を究めるという課題に入りましょう。

物事の本質を掴み、将来を見据えて的確に行動した土佐の勤皇の志士、坂本竜馬は、勝海舟の開明に触れて開眼し、的確に本質を掴んで乱世の行く末をしっかり見定めて、信念をもって行動しました。本質を的確に掴む過程を、反対の仮定のもとに考察しましょう。もし、彼が勝海舟に出会っていなかったら、世界を知ることはなかったであろう。日本の立場を知らなかったであろう。もし、彼の頭脳と思考力が柔軟でフレキシブルでなかったなら、新しい知識を理解し自分のものにすることがなかったであろう。そしてピストルに着目しなかっただろうし、信念と勇気をもって行動できなかったであろう。彼はその時代の一般的な考えに拘束されることなく、時流に先んじていました。日本はいかにあるべきかということを真剣に考えていました。世界情勢を把握し時の流れ行く様を正確に展望しきたるべき時代を明確に察知して行動する必要があります。彼は土佐勤皇党に物足りなさを感じていたとはいえ、開国論者を国賊ときめつけていたのです。彼の目を開かせたのは、勝海舟の開国論が日本の将来を広く大きく考えたものであったからです。彼は良いと思った事を素直に認め、それを自負するだけの柔軟な思考を持っていたということです。

ラグビーの話にもどしましょう。ラグビー発祥の地、イギリスにおいても、世界のメジャー国においても、古き良き伝統を大切にしながら、新しい息吹を入れて力強く普及発展をしています。日本も後進性を排して、先進国の一歩先を行ってこそ世界に追い着けるのです。実際問題として、具体的に方策として考えられることは、ルールを「正確」に守るという点で世界の一歩先を歩み、そうすることによって、プレーの内容で世界の二歩先を行くぐらいの決意と努力が必要でしょう。その結果、具体的には、勝つためには平気（または仕方がない）となってしまっているペナルティでゲームが切れることがぐっと少なくなり、ハンドリングとコンタク時のボールの生かし方が上手になれば、継続のレベルがグッと上がり、その結果スピーディになることでラグビーそのものがもっと面白くなれば、人気が上がり、競技人口やファンが増えること間違いないところです。そのことは協会だけの仕事ではありません。ラグビーを愛するあなたにとってもやりがいのある仕事なのです。ラグビーの本質の考察から明日へのイメージを膨らませて、あなたのポリシーを打ち立てて、ラグビーを思いきり楽しんでください。

2002.03.23

西川　義行